山村政明遺稿集

いのち燃えつきるとも

大和書房

いのち燃えつきるとも　山村政明遺稿集
一九七一年六月一五日初版発行

著者　山村政明
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口一～三三
郵便番号　一一二
電話（二〇三）四五一一
振替東京六四二二七
印刷　鎌倉印刷
製本　東京美術紙工

《検印略》©1971　0095-050220-4406

いのち燃え
つきるとも

―山村政明遺稿集―

青春に悔いはない！
文学、宗教、政治、民族問題、学生運動
すべてに可能な限りの自己をぶつけてみた
はかないけれど、きよらかな恋もした
悔いはない！　せめて自分にそう云いきかせねば……
ただ、疲れすぎた
疲れきって、もう、歩み続けることができない

断片＝Rの手記（Ⅰ）―六九年夏―より

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

二つの祖国所有者の叫び

李　恢成

この一つの青春の死が生者に語りかけてくるものをぼくらはどう受け取るべきなのだろう。梁政明。山村政明。この二つの姓名を所有した二十五歳の青年は、ある日人々にあまりにも短かすぎた生涯、無惨な処刑として息をのませる焼身自殺によって生命を絶つことになったのであった。

彼には二つの姓名があったように、二つの祖国があった。九歳まで朝鮮人であった少年の彼は、その年の内に日本人、厳密にいうならば、父母の意志にもとずいて帰化することで死の寸前まで日本人であった経歴の持主である。遠い少年期におこった突然のアクシデントは、はじめは何事もなく感じられるトゲのように少年の感覚をねぶって過ぎたが、それはやがて雁股（かりまた）の矢尻のようにするどく柔かい皮膚を突きぬけていった痛みを彼に呼び醒ますものであった。青年となった山村政明はそのことを素朴な小説形式のなかにおいても表現しようとつとめているが、たとえば断片的な手記のなかに次のような書きつけが見られる。

ぼくが九歳の少年でなかったら、国籍帰化を拒んだろう。父母はぼくたち子供の将来、進学、就職の不利を免がれるためというが、ただそれだけで、自らの祖国を棄てることができたのか？

この言葉は、梁政明が発したものである。帰化人の父母に向けて、民族の血の騒やぎを禁じえぬ息子が日本人である自分への疑問をつのらせながら問いつめている言葉である。いわば彼は、みずからの意志によらず、他者にされた人間であった。父母が息子達を他者へと引き入れた心情に他意があろうはずはない。かなしい愛情ではあるが、梁青年も知っていたように、帰化することで子供を社会からの差別、偏見から引き離そうとしたのである。もちろん、そこには自民族にたいする親の偏見や風化からくる孤立感などが働いていたことも見逃すことはできないだろう。

しかしいずれにせよ、そこに民族的差別や偏見があるかぎり、帰化によって自由を得ることは至難であり、かえって帰化者なるが故の苦悩がつきまとうのが実情である。それはときとして、生きのびようとする人々に高価な代償さえもとめるが、日々の人生はそれでいてけっして明るくない。

梁青年は死の間際まで、祖国喪失者の暗い意識から自由になることができなかった。日本人にもなり切れず、さりとて朝鮮人としても「裏切り」意識にさいなまれたのは、彼が純粋に自分が何者なのかを追いつめようとしたからであろう。しかも彼の「帰化」は内発的なも

のでなく、ある日とつぜん外部から侵入してきたものであった。彼は異人同心の心持ちで日本人、朝鮮人に接し、出路を見出そうと試みる。だが、帰化者の枷が邪魔して溶けこむことができぬし、むしろさまざまな形で拒絶反応を感じる場合が多かった。朝鮮人からは日本人とみなされ、日本人からは朝鮮人として扱われる場合、どのような生き方が可能であったのか。この絶対孤独は帰化者でなければ理解できぬという彼の告白は、たとえ悲観的すぎるとしても、ぼくらの体験できぬ狂気の世界だったのかもしれない。

祖国に絶望する彼は、一体、私の安住の地はどこにあるのか、と問いかけざるを得ない。その揚句に、安息を信仰にもとめ、神の国を祖国としようとしたのは、あるいは自然の成行きだったともいえようか。しかし、来世の福音を説く神にあきたらず、現実の変革をめざして学生運動につきすすんだのも彼の一面であった。

ぼくらはこの遺稿集を通じて、山村青年の混沌とした世界、苦悩する青春に触れることになる。ここには自分の運命に立ち向おうとした稚い魂が、人生を肯定しながらしだいに挫折していった姿がそっくり黙示されている。潔癖で一本気な性格や、感傷的で素朴な息遣いやが、なぜか痛恨の気持をこのとき惹き起させる。

死者をいたむ気持は、ぼくを撫然とした想いに誘いこむ。なんと未熟な死なのだ、という感があるのだ。帰化者の暗い世界をまっすぐに駆けぬけていった生き方、死にいそいだ一途さが額縁にはまった単彩画のようにはっきりしすぎていて、死とは何かという疑問を根源から想像してみたくなるのである。これは死者を冒瀆するための想像ではなく、同世代に属す

る梁政明への痛恨、にちがいないのだが。

もし彼が、奪われた自己の主体性の復権をめざして、「ブルガサリ」のようにもしぶとくおのれを鍛えていたら——。朝鮮戦争のさなかに死んだある作家、かつて日本で作品を書いたこともあるその作家は、「ブルガサリ」という鉄を溶かして飲むという想像上の虫をテーマに、不死身の民族魂を書こうとしたことがあった。伝説にあるこの強靱な虫に托して、彼は日本総督府時代に生きる朝鮮人のバルチザン精神を暗にしめそうとしたのであろう。じっさい、この「ブルガサリ」のごとく、朝鮮人は生きてきたのであった。

歴史をみれば、明らかである。五千年の朝鮮史は外敵による侵略の記載に欠ける時がなかったが、それはつまり個人の運命がたえず死に晒され、死に面するほど不屈に生きのびてきた民族の歴史を明らかにしている。朝鮮人が、よく死に切れずに生きてきたというのは本質的にいって誇張ではなく、生きるよりも死ぬことが易しい受難の中で「ブルガサリ」のように生きてきた人々の抱懐といえるものであろう。自殺しない民族ともいわれるのは、自殺の美学を理解しえぬからでなく、自死を拒む楽天的な美学を死の淵から生み出してきたからとみるのが楽しいのである。

自民族のこういう緊張した生命力を、もしも梁政明が体得していたら。こう想うのは、死者にムチ打つ心ない仕業であろうか。帰化者の孤独は本人でなければわからぬものであろう。だが、そのために死に導びかれるとすれば、それは人間としての叛逆の自由を放棄することであり、未来にかかわるみずからの可能性を裏切ることでしかないだろう。死への叛逆こそ、

現代の青春である。ぼくらは別個に死んでも、死にいそぐことなく、ほんとうに死ぬ時と場所を得たいものである。

だからこそ、ぼくは梁政明が生きつづけ、帰化者としての生命を創り出してほしかったと思わずにはいられない。パターンとしての宿命ではなく、たとえば日本人として両民族の橋渡しとなる独自の存在者として不屈に青春を持続させること、その至難さに生きることこそ現代の青春を深めてくれるものではなかったのか。もちろん、彼はその努力を人一倍試みた誠実さの持主であった。その思想と行動がよしんば一層強靱な弁証の手段にささえられていたらと思わせはしても、彼が青年らしい多感さと誠実さで短かい青春を人々のために尽そうとした痕跡はありありと残っており、それがゆえに一層死が惜しまれるのである。

ぼくらは一人の同胞を失った。そうではなかろうか。山村政明を失ったのは日本人であり、梁政明をなくしたのは朝鮮人である。ぼくらは別々に彼をいたむこともできるが、共同葬儀者として彼の霊をなぐさめる方がもっとやさしい行為になるのだという想いを禁じえない。彼の死がいまざまな問題を提起していることもたしかである。ほかの原因、たとえば、学園における問題もあるが、彼を死へ追いやった根源的な原因が民族問題から発生していることをぼくらは生者として確認しよう。そしてぼくら共同葬儀者がいまはこの社会から差別、偏見の壁を切り落す共同作業者になっていくことが死者への最高のはなむけであり、人間としての勇気ある行為であることをさらに確認したいと思うのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

この遺稿集を読むことは、率直のところ、ぼくにとって苦痛であった。なんどかぼくはYさんを思い出した。まだ少年の頃、わが家に父を訪ねてくる風体いやしからぬ紳士がYさんであった。市内の大きな会社の課長とかいうその人物はどこから見ても日本人にうつった。てっきり。ところがある日、父はその人物が同胞であるが帰化していることを何かのときに話してくれたのである。その瞬間、ぼくはその人物がいつも夕闇が落ちてから訪ずれてくるわけをとっさに理解したつもりになった。そして、なんとなく不幸だった。

山村青年は死んだが、彼のように苦しみを経験している人は日本人にずいぶんいるはずである。帰化者は戦後五万人を数えるというが、沢山のYさんがそこにはいるのである。そんなことを想起していくと、この遺稿集を読むことはひどくつらい。個人的ないい方をすれば、彼が帰化者でありながら、つねに朝鮮と日本を同時に考え、たとえば金嬉老を「金嬉老同胞」と書いているところなどが胸にこたえてならないのである。また「抗議・嘆願書」の中で、日本人学生の立場で諸問題を建白しながら、同時に「南北朝鮮の自主的平和的統一実現！」と記して残したのを見るとき、ほとんど絶句の想いに駆られる。

いのち燃えつきるとも／目次

序文　二つの祖国所有者の叫び　李恢成

〈プロローグ〉わが行く手に光なし……15
——青春の墓碑銘として——

断片＝Rの手記（1）——六九年夏……16
(1)学園闘争の挫折
(2)苦学の限界
(3)民族の宿命
(4)美しい少女
(5)背教の苦悩
(6)断　片

〈I章〉信じたい生きたい……39
——苦闘のノート・書簡より——

孤独と不安の中で……40
——高校・東洋工業時代の〈手帖〉より——

この愛にすがって生きよう ……61
——〈書簡〉より——
たださびしさだけが ……130
——一九六五年の〈ノート〉より——
〈II章〉青春・その輝きの底に ……147
——未完のスケッチ集——
最も敬愛する友へ・他—詩篇 ……148
三　月 ……156
風よ起れ（未完） ……162
さすらいの青春（未完） ……172
*
文学と私 ……175
〈III章〉知性は苦悩する ……181
——真理への模索——

Rの手記（Ⅱ）—七〇年初夏……182
(1)再び夏が…
(2)苦闘を省みて（略）
(3)学園を去る
(4)あの人のこと
(5)宿命の血が…
(6)ひとつの悲喜劇
(7)断　片
ある魂の告白……192
——ある在日朝鮮人の手記——
＊
近代朝鮮と日本軍国主義……206
——歪められた歴史教育——
当面する大学問題……223
＊
抗議・嘆願書……228
——とりわけ早大二文当局および
すべての二文学友に訴える——

〈Ⅲ章〉挫折、そして……231
——宿命の血を見つめて——
帰　省……232
——暗い夏の逃避行——
〈エピローグ〉訣　別……279
——あとに生きる人たちへ——
遺　書……280
回想　弟・政明の死におもうこと　山村修一
政明と私とのこと　山村隆司
想い出　大石啓子

装幀　青柳寿夫

〈プロローグ〉

わが行く手に光なし

——青春の墓碑銘として

＊断片＝Rの手記（Ⅰ）
—69年夏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.